

麻痺領域觸定法ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30741

原 著

麻痺領域觸定法ニ就テ

陸軍三等軍醫正 山 本 幹 雄

緒 言

一般内科の疾患ノ診斷上視觸打聽診技術ノ必要ナルハ茲ニ之ヲ說クノ要ナシト雖、日進月歩ノ醫學ハ各種診療器械及理化學的試驗ノ進歩發達ト共ニ診斷ヲシテ極メテの確容易ナラシムルニ至レリ。然レドモ是等各種ノ器械及設備ニハ一定ノ要約及制限アリテ、之ヲ隨意隨所ニ應用シ能ハザルノ不利ヲ免レザルモノトス。故ニ單ニ是等ノ器械裝置ノミニ信賴シテ從來唯一ノ診法トセラレタル視觸打聽診等ノ熟練ヲ輕視スルガ如キハ大イニ慎ムベキコトニ屬シ益々是等ヲ進歩發達セシメ、其ノ効果ヲシテ一層増大セシムルガ如ク常ニ研究ヲ要スルモノナリト信ズ。

(245)

今茲ニ述ベント欲スルモノモ一種ノ觸診法ニ屬シ、皮膚ノ輕擦ニヨリ感受セル一種ノ變化ニヨリ之ヲ判定スルモノニシテ其ノ成績ノ比較的確實ナルト診查ノ迅速且容易ナルト類症鑑別上主要ナル任務ヲ有スルコトアルト、從來全ク患者ノ自覺症狀ナリシモノヲ他覺的ニ之ヲ認定シ得ルモノナル等利便少ナカラザルヲ信ズルヲ以テ、一些事ナリト雖之ヲ公開シテ識者ノ批判ヲ乞ヒ以テ其ノ應用ヲシテ一層完璧ナラシメタキノ意見ヲ有スルモノトス。

附 記

茲ニ麻痺ト云フハ狹義ニ於ケル知覺麻痺即チ觸覺麻痺ヲ云フモノニシテ其ノ麻痺ノ著シキ高度ノモノニシテ皮膚ノ皺壁消失平滑トナリ血行障害ヲ有スルモノ、如キハ觸診上之チ區別シ得ルハ勿論既ニ一瞥之ガ異ヲ判定シ得ルモノトス、然ルニ予ガ茲ニ觸定法トシテ推奨セント欲スルモノハ如斯高度ノ變化ヲ有スルモノニ非ズ、彼ノ輕キ脚氣ニ於ケルガ如ク、外見上全ク變化ナキハ勿論之ガ觸診ヲ行フモ一定ノ習練ヲ經タルモノニアラサレハ何等ノ感作ナキノ輻度ノモノヲモ觸定シ得ルト云フニアルコトヲ注目研究セラレンコトヲ乞フモノトス。

觸定法案出ノ動機

盲人ニシテ一回ノ觸察ニヨリ刀劍ノ鑑定ニ妙ヲ得タルモノアリト聞ク、又盲人ガ點字ヲ觸案シテ讀ミ下スコト流ルルガ如キモノアルヲ見ル。如斯ハ何レモ其ノ感覺ノ過度ニ發達シ甚ダシク銳敏ナルノ然ラシムルモノニシテ、到底常人ノ想像ダニ及バザルガ如キモ熱心ト熟練途ニ茲ニ至リタルモノトナサザルベカラズ。又古ノ醫家ノ檢脈ニ對スルノ智識ハ吾人ノ豫想以上ノ發達ヲ示シ、患者ノ診斷ニ當リ先ヅ脈ヲ檢スルコトハ診斷ノ順序トシテノ必要ノミナラズ、之ニヨリテ病徵及經過ノ良否ヲ察スル等甚ダシキ價值ヲ置キシニ考フルモ知ルベキナリ、依テ以上ノ諸方法ヨリ考察スルニ吾人ノ觸覺ナルモノハ其ノ熟練ニヨリテハ殆ド無限ニ發達シ得ルモノナルコトニ想到セシムルモノトス。依テ既ニ一定ノ解剖的變化ヲ有スル病的狀態ニアリテハ之ガ觸定ヲ熟練セバ必ず或ル種ノ變化ヲ覺知シ得ルモノナルベシトノ確信ノ下ニ之ガ研究ニ努メ遂ニ所期ノ成績ヲ獲得スルニ至リタルモノニシテ進歩シタル今日ノ醫學界ニアリテモ此ノ原始的技術ノ徒事ナラザルヲ信ジ、之ヲ一般ニ推奨セント欲スルモノナリトス。

觸定法ノ價值

疾病ノ確實ナル診定ハ他覺の方法ニヨルヲ以テ有利トナス、殊ニ法醫學的關係並ニ軍隊等ノ如キニ於テ一層其ノ必要ヲ感ズルモノトス。然ルニ從來脚氣其他ノ麻痺ノ如キハ單ニ患者ノ自覺ノミヲ以テ主徵候トシ之ヲ他覺的ニ察知シ

得ルモノトナサザリシナリ。如何トナレバ從來ノ成書ニ於テモ之ヲ他覺的ニ検査スベキ方法アルヲ記スルコトナク概
ネ次ノ如キ記載ヲナシアルモノトス。

知覺機能検査ノ成績ハ一ニ患者ノ陳述ヲ根據トシ、之ニヨリテ診斷ヲ下シ得ベシ。故ニ其ノ成績ノ確實ナルト否ト
ハ患者ノ精神状態即チ意識ノ明晰及注意力ノ集注如何ニ關スルコト言テ俟タズ、シカモ吾人他ニ之ガ對照トナスベキ
方法ヲ有セザルガ故ニ其ノ検査法ハ臨牀上最モ困難ナル事項ニ屬シ、檢者ノ熟練ヲ要スルモノトナシ其ノ検査ニ對シ
テハ各種ノ注意事項ヲ掲ゲアルヲ常トス。

又臨時脚氣病調査會委員ノバタヴィア附近「ベリベリ」病院調査復命書中觸覺鈍麻ニ關シ左ノ記事アリ。

脚氣患者ノ感覺ノ度合ヲ問ヒテ、其ノ確答ヲ得難キコトハ我邦ニ於テモ臨牀家ノ常ニ經驗スル所ナリ。況ンヤ今回
ノ如キハ既ニ述ベタル如ク患者ノ性質遲鈍ナルニ加フルニ言語ノ不通ヲ以テス、其ノ調査ノ困難多大ナリシコト言テ
待タズ。鑛山病院「ベリベリ」病院ノ日誌中ニモ盡ク蟻走ノ感トノミ記シテ詳細ナル記載ヲ缺ケル者多シ、故ニ觸覺
鈍麻ノ境界ノ如キモ圖ヲ以テ示スコト能ハズ云々トアリ。

又臨時脚氣病調査會附屬研究室ヨリノ明治四十三年中研究事項報告中ニハ知覺障礙ニ關シ左ノ記事アリ。

知覺障礙ハ觸覺及痛覺ニ就テ檢セシガ、其ノ障礙ノ程度ハ全ク知覺脱失ニ近キアリ、或ハ僅ニ知覺ノ鈍麻セルニ過
ギザルモノアリ、而シテ障礙ノ範圍ハ一般ニ廣汎ニシテ胸部以下ニ亘ルモノ十名、腹部以下ニ亘ルモノ十三名、下腿
及足部ニ局限セルモノ僅ニ二名ニ過ギズ、又口唇周圍ノ知覺鈍麻ヲ有セルモノ四名、前膊及手指ニ及ベルモノ六名ナ
リトス云々トアリ。

又藤井善一氏ハ明治三十七八年戰役ニ於ケル脚氣ニ就テ報告シ、知覺及運動麻痺ニ關シテハ單ニ附圖ヲ參照スベシ
ト記シ、十九種ノ麻痺領域ヲ示シタル附圖ヲ添附セラレタリ。

又シヨイベ氏ハ脚氣ノ初期又ハ恢復期ニ於テ知覺鈍麻ハ斷續的ニ不定確ニシテ朝ニ存在シ夕ニ消失スルコトアリト云

ヘリ、然レドモ之レ患者ノ自覺的ニヨルモノニシテ果シテ朝ニ存在シタニ消失シ得ルモノナリヤ、大イニ疑ナキ能ハズ、予ノ觸定法ニヨレバ患者ハ全ク知覺鈍麻ノ恢復セリト訴フルモ尙一定時日ハ其ノ以前麻痺セシ領域ハ幾分其ノ跡ヲ存スルモノナルコトヲ觸定シ得ルヲ以テ朝夕神經及皮膚ノ狀態變化スル如キハ信ズル能ハザルモノトス。

以上要スルニ從來ハ知覺麻痺ハ全ク患者ノ自覺的訴ヘテ基本トシテ記載セラレタルニ過ギズ。然レドモ予ノ觸定法ニヨレバ全ク他覺的診定ナルヲ以テ、言語ノ不通、患者ノ精神狀態等何等關係ヲ有セザルヲ以テ其ノ調査ニ甚ダシキ便益ヲ得ルモノトス、加之機能的麻痺ト機質的麻痺ノ區別上甚ダ有利ニシテ患者ハ麻痺ヲ訴フルモ、他覺的異常ヲ認メザル時ハ之ヲ機能的疾患ニ疑ヲ置キ之ニ必要ナル檢索ヲ進ムルコトヲ得ルモノトス、又極メテ輕症ナル麻痺ト雖之ヲ他覺的ニ判定シテ患者ヲシテ甚ダシク驚愕セシムルト共ニ、其ノ經過ノ輕重變換ヲモ容易ニ之ヲ診定シ得ベク爲メニ患者ヲシテ著シキ信賴ノ念ヲ起サシムルノ利得ヲ有スルモノトス。

尙本法ハ單ニ擦過ニヨリテ之ヲ判定スルモノナルヲ以テ患者ノ自覺ニヨル應答ヲ求メテ、其ノ領域ヲ定ムルニ比シ勞力ト時間的關係ニ於テ甚ダ有利ナルモノトス。

要スルニ本觸定法ハ一部ノ疾病ニ對シ臨牀上極メテ必要ナルモノニシテ、醫家ハ須カラク本技ノ熟達ヲ期スルノ要アルモノト認メラル。

末梢神經麻痺ト皮膚ノ變化

脚氣ニ於ケル末梢神經ノ變化ハ最モ主要ナルモノニシテ、之ニ關スル精密ナル報告ヲナセルモノハチユクル、青柳、丸山、本田、島蘭氏等ナリトス。今其ノ概要ヲ述ブレバ末梢神經ノ變化ハ末端ニ最著明ニシテ上方ニ行クニ從ヒ漸次其ノ變性ヲ減ズ、且其ノ變性ハ間斷性ニシテ健全ナル部ト變性セル部位ハ相錯互ス、又一ノ神經束ノ内ニ於テスベテノ神經纖維ハ平等ニ變性スルモノニアラズシテ、其ノ間ニ健全ナル神經纖維ノ存スルモノナリ。而シテ知覺神經ニア

リテハ軸索ノ消失腫脹分裂螺旋狀ノ變化等ノ外フアーテル、バチニ―氏小體ニ於テ軸索及終末枝ニ多少ノ變化ヲ呈スルモノナリト云フ。

以上ノ如ク既ニ神經纖維ニ於テ一定ノ變化ヲ起スモノナリトセバ、其ノ配下ニアル皮膚筋肉等ニ於テモ一定ノ變化ヲ誘起シ得ルモノナルコトハ又疑ヲ入レザルコトニ屬ス、只其ノ變化タルヤ極メテ微ニシテ從來學者ノ注目ニ價セザリシモノナラムト信ズ、而シテ本觸定法ハ神經ノ變化ヲ觸定スルニアラズシテ皮膚ノ變化ヲ觸定シテ神經機能狀態ヲ判定スルモノナルヲ以テ既ニ神經ニ變化アリ、次デ皮膚ニ輕微ナルニモセヨ一定ノ變化ヲ起スニアラザレバ、之ヲ觸定シ能ハザルモノナルベシト信ズルヲ以テ神經變化ノ後若干時日ヲ經過スルニアラザレバ觸定困難ナルベシト推測セラル、之レ前項記載ノ如ク神經麻痺ハ消散スルモ尙若干時日ハ麻痺領域ヲ推定シ得ルト同様ノ關係ニシテ即チ皮膚ノ變化及變化ノ恢復ニハ一定ノ時日ヲ要スルニヨルモノナルガ故ナリト思考セラル。

麻痺領域ヲ觸定シ得ルノ理由トシテノ考察

末梢神經ニ於テ既ニ解剖的變化ヲ呈スルヲ以テ、之ガ分布區域内ノ皮膚ニ於テハ麻痺ノ程度ニ應ジ、次ノ諸件ニ於テ一定ノ變化ヲ誘起スルモノナルベシトノ推定ヲ有スルモノトス。

一、皮膚ノ緊張度ノ變化

即チ小皺壁等ノ關係ニ差違ヲ生ジ、溝ハ淺ク滑澤ノ傾キヲ呈シ、彈力纖維及結締組織纖維ノ萎縮等ニヨリ皮膚ノ幾分菲薄並ニ弛緩ノ狀ヲ呈スルニ至ルベシ。

二、皮膚ノ榮養狀態ノ變化

之ニヨリテ彈力纖維ノ萎縮若クハ變性、乳頭並ニ「エビテルライステ」ノ萎縮等ヲ來タスモノナルベシ。

三、汗、脂分泌腺ノ變化

汗腺及皮脂腺ノ分泌狀態ノ變化、腺ノ萎縮尙甚ダシキニ至リテハ腺ノ變性等ヲ來タスニ至ルベシ。

四、立毛筋ノ作用等ノ變化

神經ノ變化ト共ニ筋肉ニ於テモ、其ノ榮養狀態ニ變化ヲ起シ甚ダシキニ至リテハ變性スルニ至ルベシ。

五、血行ノ變化

末梢毛細管ノ貧血若クハ鬱血等ノ變化ヲ起シ、隨テ榮養ニモ至大ノ關係ヲ起シ甚ダシキニ至リテハ血管壁等ノ變性ヲ見ルニ至ルナラム。

上記ノ内三乃至五ハ交感神經ノ灰白枝ノ作用ニ歸スベキモノナルガ如キヲ以テ果シテ知覺異常ニ際シ是等モ關與スルモノナリヤ否明カナラザルモ、上記ノ諸變化ハ其ノ麻痺ノ程度ニ應ジ可能性ノモノナラムト想像セラルルモノトス、之ヲ要スルニ各種ノ變化ハ極メテ輕微ナルニ過ギザルニモセヨ、健康皮膚ト比較シテ幾分タリトモ異常ヲ呈スルモノナルベク、從テ之ガ觸診ニヨリテ一種ノ異同ヲ辨セシムルモノト考ヘザルベカラズ。

觸定法應用ノ範圍

本法ハ觸覺障礙ヲ判定スルニ應用セラルベキモノニシテ、其ノ範圍ハ概ネ次ノ如ク推測セラレ尙運動麻痺等ノ疾患ニ對シテモ、漸次其ノ應用圈ヲ擴大シ得ルモノナリト豫想セラル。

一、末梢神經疾患

多發性神經炎

切創ニ因ル神經損傷

脚氣

癩病

二、脊髓疾患

脊髓癆

脊髓微毒

脊髓炎

三、腦疾患

腦出血

腦微毒

以上ハ麻痺領域ヲ判定シテ之ヲ診斷ニ資スルモノ。

四、官能性神經病

ヒステリー

外傷性神經症

以上ハ麻定上ノ陰性成績ヲ以テ診斷ニ資スルモノトス。

觸 定 法

從來應用セラレアル腹部ノ觸診ノ如キモ主トシテ手指ノ觸覺ニヨルモノナレバ各種ノ注意ト熟練トヲ要シ、彼ノボアス氏ノ *denkend zu palpieren und palpierend zu denken* ナル語及ビスビーゲルベルグ氏ノ指頭ニ眼ヲ持ツヲ要ス、エワルド氏ノ指尖ヲ以テ腹腔内ヲ透視スベシ等ハ大イニ味アル金言ナルト同様本法ニ於テモ縝密ナル注意即チボアス氏ノ警句ノ如ク考ヘツツ觸診シ觸診シツツ考フノ一語ハ全ク本法ノ真髓ナリトス、依テ周到ノ注意ヲ以テ微細ノ變化モ大ナル物トシテ覺知シ得ル如ク熟練スルヲ要スルモノナルモ、其ノ方法ハ比較的單簡ニシテ單ニ輕擦スルノ間

(251)

ニ考察スルニアリテ全く一種ノ熟練ニ屬シ、文章ヲ以テ之ヲ完全ニ説明シ得ベキモノニアラザルモ、予ハ概ネ次ノ方法ニヨリ觸定スルモノナリ。

一、手背殊ニ指背ヲ患部ニ貼シ身體ノ末梢ヨリ中樞ニ向ヒ輕キ擦過ヲ行ヒ、其ノ際感ズル一種ノ感覺ト摩擦ニヨリテ生ズル一種ノ音響トニヨリ識別ス。

手ノ掌面ハ觸覺最モ銳敏ナルヲ以テ、之ガ觸定モ手ノ掌側ヲ應用スル方可ナラントハ誰シモ考フル所ナランモ掌側ハ由來發汗等ノ爲メニ濕潤ノ傾向ヲ有シ輕擦滑轉上有利ナラザルヲ以テ掌側ニヨリテ之ヲ判定スルコト殆ド不可能ナル場合多シ。又掌側ニテ擦過スルニ比シ手背ハ操作ニ便利ニシテ患部ニ貼付シ易キニヨリ特ニ手背ヲ選定セルモノトス』稍高度ナル麻痺ニアリテハ輕キ觸壓ト同時ニ麻痺ノ存在スルコトヲ認知シ得ベキモ、輕度殊ニ脚氣ノ恢復期ノ如キニアリテハ單ニ觸レタル一種ノ感覺ノミニテハ、之ガ判定困難ニシテ同時ニ擦過ニヨル一種ノ音響ヲモ考察中ニ入レザルベカラザルコト恰モ打診ニ於テ音響ヲ聽クト同時ニ一種ノ抵抗ヲモ考ヘザルベカラザルト同一ナリトス。

二、麻痺ノ限界ヲ定ムルニハ一指若クハ二指或ハ三指ノ連接等各種ノ觸覺ト音響トヲ精査考察スルヲ要ス。

脚氣ノ麻痺ノ如キ一定ノ神經分布區域ニ局限スルコトナク概ネ地平ノ形態ニ麻痺スルモノニアリテハ、患部ノ限界線ニ平行スル如ク指背ヲ貼シ反覆輕擦ノ要アリ、其ノ際各種ノ部位ニ適應スルガ如ク一乃至四指ノ連接等適宜ニ應用スベキモノトス。

觸定法習得ノ順序並ニ注意事項

本法ハ檢者ニ感ズル一種ノ微妙作用ニシテ幾多ノ練習ヲ要スルモノナルヲ以テ左ノ順序ト注意事項ニ留意スルノ要アルモノトス。

一、觸定法習得ノ順序トシテ脚氣患者ノ如キニ問診ニヨリテ麻痺領域ヲ確定シ、之ヲ輕擦シテ健康部ト患部トノ觸覺上ニ於ケル異同辨別ヲ練習ス。

二、多クノ脚氣ハ左右ノ麻痺程度ハ全然一致スルモノニアラズシテ一方ニ於テ多少強キモノナルコト多シ、之レ予ノ觸定法ニヨリテ發見セシ事實ナリトス、故ニ其ノ強弱ノ程度ヲモ承知シテ其ノ輕重判定ノ熟練ニ供スルコト。

三、擦過ハ常ニ末梢ヨリ中樞ニ向ヒ反覆シ、往復共ニ擦過スルハ判定ヲシテ却テ不利ナラシムルモノトス。

四、患部及檢者ノ手ハ乾燥シ居ルヲ要ス、發汗等ノ爲メ濕潤シ居ル時ハ判定殆ド不可能ナリ。之ガタメ夏期ニアリテハ其ノ判定困難ナルコトアリ。

五、個人ニヨル皮膚ノ粗密、硬軟並ニ毛ノ有無等ハ觸覺上大ナル差アルヲ以テ、各種ノ場合ニ於ケル練習ヲ必要トス、中等度ノ生毛ニアリテハ支障ナキモ甚ダシキ生毛ニシテ全ク皮膚ニ觸レ難キ場合ノ如キハ其ノ判定困難ナルコトアリ。

六、患者ノ體位ハ安靜平臥セシムルヲ最良トス。

觸定時ノ感覺及ヒ音響

觸定ノ爲メ患部ニ指背ヲ接著スルト同時ニ一種ノ異樣感ト共ニ滑澤ニシテ、而モ健康部ニ比シ稍々柔軟ヲ覺ユルガ如キ感アリト雖一種ノ直感的感覺ナルヲ以テ自ラ味ヒ自ラ悟ルノ外ナキガ如シ。

次ニ種メテ輕微ノ麻痺ニアリテハ單ニ觸覺ノミニテハ判定困難ニシテ擦過ニヨリテ生ズル一種ノ音即チ健康皮膚ニシテ乾燥シアル場合ハ「シヨリ」ト極メテ爽快ナル音響ヲ發スルモ麻痺皮膚ニアリテハ、其ノ音響低ク且不活潑ニシテ若干濕潤性ヲ帶ブルガ如キ感アリ。殊ニ麻痺ノ限界ヲ決定スル上ニ於テハ此ノ擦過ニヨル音響ノ差違ヲ聽取スルヲ極メテ重要ナリトス、此ノ音響ノ聽取ニヨル判定モ前者ト同様自問自答ノ外ナキモノトス。

結 論

以上要スルニ麻痺領域ノ觸定法ハ一些事ノ如キニ似タレドモ、從來患者ノ自覺症狀ニ屬シタルモノヲ他覺的ニ認知セシムルモノニシテ、其ノ應用ノ妙ヲ得バ比較的重要ナル診斷資料トナシ得ルモノナリトス。殊ニ軍隊ノ如キ他覺的検査ヲ以テ診斷ノ要素トナス所ニアリテハ、此種ノ検査法ノ最モ適當且必須缺クベカラザル技術ナリト信ズルモノナリ、依テ予ハ日常脚氣ノ如キヲ診斷スルニ當リテハ知覺麻痺領域ハ全ク患者ニ問診スルコトナク他覺的ニ之ヲ決定シテ患者ニ告グルヲ常トス、然レドモ脚氣ヲ除クノ外ハ未ダ各種ノ疾病ニ對シ、之ヲ應用スルノ機會ニ乏シク爲メニ本價値ヲシテ十分ニ發揮セシムル能ハズト雖、尙將來機ヲ得テ研究ノ歩ヲ進メント欲スルモノナリ。

終リニ一言スベキハ本法ハ決シテ予個人ノ獨技ニアラズシテ何人ト雖、熟練ニヨリ漸次進歩ヲ來タシ得ルモノナルモ本技ノ効果ヲシテ十分ニ發揮セシメンニハ其ノ熱心度ト症例ノ多寡ニヨリ差アルベキモ、比較的長時日ノ演練ヲ要スルモノト認メラル各位宜シク本法ヲ有利ニ應用セララルト共ニ此ノ單技ヲ導火線トシテ將來一層重要ナル各種ノ方法ヲ案出セラレンコトヲ切望シテ止マザル處ナリトス。